

書評

野村総一郎, 中村 純, 青木省三, 朝田 隆, 水野雅文 シリーズ編集

野村総一郎 編

《精神科臨床エキスパート》

抑うつ の鑑別を究める

渡邊衡一郎

今から 10 年前, 「抑うつ」は治療が簡単な病態とみなされていた。当時, 治療の主流となっていた選択的セロトニン再取り込み阻害薬 (SSRI) は QOL に悪影響を及ぼすような副作用が少なく, 抑うつ症状だけでなく, さらに不安にもその効果のスペクトラムが広がったためである。しかし昨今, 「抑うつ」との主訴ながら治療者が難渋する例をよく目にする。抗うつ薬治療が時として負の転帰をもたらす病態があることも分かってきたし, 双極性障害への関心も高まってきた。そのような中で今回のズバリ「鑑別を究める」と題された本書を, 一気に読んだ。また医局に本書を置いていたところ, 何人もの医局員が関心を持って読んでいた。

本書は編者である野村総一郎氏が今最もこだわり, かつ究めたいと思う内容と推察できるものであり, 執筆者も各サブスペシャリティのエキスパートたちである。編者自身による「序論: 抑うつ診断の難しさ」における本書の論点の整理, さらに気鋭の杉山暢宏氏による「抑うつ の精神医学的意味」における, 「抑うつ」というものの原点に戻って診断・治療について再考するという作業。まず, この 2 章で頭が整理された後に, 鑑別となる多くの疾患について, 「抑うつ」症例を詳細に呈示している。さらに, 最新の DSM-5 を用いて診断基準を説明

するだけでなく, 鑑別のポイントや診断のためのツールまでも紹介している。統合失調症や発達障害, パーソナリティ障害, 身体疾患, 児童思春期の疾患から高齢者のアルツハイマー病に至るまで, 「抑うつ」を示し得るほとんどの疾患が網羅されている。どの章も図表を用いて非常に分かりやすくポイントが示されている。また治療を含めた対応についても具体的に記載されており, 読者に優しく手を差し伸べている。

執筆者自身が苦労した症例の紹介から垣間見えるものもある。臨床に携わる者ならば誰しもが経験のある診断の迷いがあり, 読んでいるうちにうなずく箇所がいくつもあるだろう。あるいは, 今難渋している患者をあらためて観察・検討するよいきっかけ, ヒントともなり得る。もちろん, 「抑うつ」と関係なく独立して各疾患を理解する目的で参考書のようにして使うことも可能である。本書は, 混沌としている「抑うつ」の治療に対して確実に一石を投じることになるだろう。日常臨床で迷った際に, 経験年数にかかわらず参考となる必携の書と言えよう。

(杏林大学教授・精神神経科学)

●B5 244 頁 2014 年 定価: 本体 5,800 円 + 税 医学書院刊